

## 銀と金：繊細なメス

多くの鳥類がそうであるように、雉も雄と雌でその模様が大きく異なる。雄は相手を引きつけるために派手な色をしているが、雌は周囲に溶け込み、外敵を避けるために落ち着いた灰色や茶色をしている。

この羽のペアは、その性差を再現したものである。雌の色調は地味だが、その彩色には熟練を要する。褐色の羽の複雑な陰影は、銀の絵の具で表現されている。窯の中で銀が酸化することで、茶色や黒のグラデーションが現れ、雌の褐色の色彩を表現している。

雌の頭部には、仁清が少し芸術的な表現を施してある。雌の雉には、雄のような赤い肉垂や耳がないが、この作品にはそれらがついている。おそらく、雄の雉と視覚的なつながりを持たせるために、色彩を加えたのであろう。また、本物の雉をモデルにしているが、雄しか手に入らないので、記憶を頼りに雌の色彩を変更したのではないかという説もある。また、2羽とも雄で、この「雌」は夜間に暗くなって色が薄くなった雄を表しているという説も興味深い。

仁清は、粘土窯の中でどのように変化するかを予測し、複雑な形を作り出すことに長けていた。これは鳥の姿勢から明らかである。尾は45度に上がり、首は背中に向かって滑らかな弧を描き、まるで羽繕いをしているようだ（この羽繕いの姿勢は、東アジアの絵画で雌雄を識別するために用いられるものである）。また、香炉の吹き出し口は、模様になじむように羽の形にカットされている。

この作品は、その芸術的価値が認められ、1960年に重要文化財に指定された。

## 雉のペアが再結成

この2つの香炉は雌雄の組み合わせのようで、大きさや様式が似ていることから、同時に制作されたものと思われる。しかし、雄は前田家に買い取られ、雌は別の場所に売られた。1991年、この雌は東京で所有者の水野富士子氏から寄贈された。仁清の窯でこの雉のペアが焼かれてから300年余りの時を経て、二羽の雉が再び揃い、常設展示されることになったのである。